**経営の状況**

１　事業の概要

大阪府流域下水道事業は、汚水排除による公衆衛生の向上、市街地における浸水被害の解消や河川・海域等の公共用水域の水質保全等、複数の市町村に跨り広域的に実施している都市基盤事業である。

（１）　流域の概要

流域下水道は、現在、猪名川、安威川、淀川右岸、淀川左岸、寝屋川（北部・南部）、大和川下流（西部・東部・南部）、南大阪湾岸（北部・中部・南部）の７流域12処理区の整備及び維持管理を実施し、関連する市町村の公共下水道で集められた下水を処理している。

流域下水道の全体計画区域内人口5,024,364人に対し、平成30年度末における整備済区域内人口は4,735,480人である。

　　【流域下水道事業の計画と実績及び各流域関連市町村】

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 区分  流域名 | | 全体計画 | | 整備 |  |
| 区域面積 | 区域内人口 | 人口 | 関連市町村 |
| （ha） | （人） | （人） |  |
| 猪名川 | | 5,518 | 424,447 | 424,429 | 豊中市、池田市、箕面市、豊能町 |
| 安威川 | | 8,753 | 577,444 | 575,517 | 茨木市、吹田市、高槻市、摂津市、箕面市、豊中市 |
| 淀川右岸 | | 5,023 | 418,619 | 416,701 | 茨木市、高槻市、島本町 |
| 淀川左岸 | | 5,893 | 414,429 | 398,177 | 枚方市、交野市 |
| 寝屋川 | 北部 | 6,875 | 675,936 | 666,098 | 大阪市、守口市、門真市、寝屋川市、枚方市、東大阪市、大東市、四條畷市、交野市 |
| 南部 | 8,874 | 773,953 | 754,001 | 大阪市、東大阪市、大東市、八尾市、柏原市、藤井寺市 |
| 計 | 15,749 | 1,449,889 | 1,420,099 |  |
| 大和川下流 | 西部 | 6,251 | 416,661 | 401,558 | 大阪市、堺市、八尾市、富田林市、松原市、羽曳野市、藤井寺市、大阪狭山市 |
| 東部 | 6,816 | 227,192 | 198,624 | 堺市、富田林市、柏原市、羽曳野市、藤井寺市、八尾市、河南町、太子町、千早赤阪村 |
| 南部 | 5,139 | 209,840 | 203,608 | 富田林市、河内長野市、大阪狭山市 |
| 計 | 18,206 | 853,693 | 803,790 |  |
| 南大阪湾岸 | 北部 | 12,625 | 522,100 | 486,027 | 堺市、泉大津市、和泉市、高石市、岸和田市、貝塚市、忠岡町 |
| 中部 | 6,744 | 234,467 | 135,941 | 岸和田市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町 |
| 南部 | 4,292 | 129,276 | 74,799 | 泉佐野市、泉南市、阪南市、岬町 |
| 計 | 23,661 | 885,843 | 696,767 |  |
| 合計 | | 82,803 | 5,024,364 | 4,735,480 |  |

注）猪名川と淀川左岸は大阪府分のみ

（２）　施設及び業務の概況

流域下水道事業は、 大阪府の複数の市町村に跨り広域的に業務を実施しており、処理場（水みらいセンター）14ヵ所及び32ヵ所のポンプ場を有している。施設処理能力及び直近実績（猪名川流域は大阪府分のみ。ただし年間総汚泥処分量及び汚泥処理能力については猪名川流域を除く）は以下のとおりである。

【施設及び業務の状況】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 項目 | 単位 | 数値 |
| 処理場 | 計画処理能力 | ㎥/日 | 2,701,889 |
| 現在処理能力 | 晴天時㎥/日 | 2,288,988 |
| 雨天時㎥/分 | 14,326 |
| 現在最大処理水量 | 晴天時㎥/日 | 2,050,418 |
| 雨天時㎥/分 | 14,326 |
| 現在晴天時平均処理水量 | ㎥/日 | 1,582,192 |
| 年間総処理水量 | ㎥ | 689,867,653 |
| 内訳 | 汚水処理水量㎥/年 | 661,250,451 |
| 雨水処理水量㎥/年 | 28,617,202 |
| 年間総汚泥処分量 | ㎥ | 18,919,612 |
| 汚泥処理能力(H29年度末） | 汚泥量㎥/日 | 48,013 |
| 含水率％ | 99 |
| ポンプ場 | ポンプ場数（H30年度末） | 箇所 | 32 |
| ポンプ場排水能力（H29年度末） | 晴天時㎥/分 | 3,797 |
| 晴天時㎥/日 | 5,466,960 |
| 雨天時㎥/分 | 41,572 |

（３）　建設改良について

平成30年度における実施事業としては、下水道の機能を維持させるため、下水道施設の改築を計画的に実施するとともに、内水浸水リスクの高い寝屋川流域において、雨水対策のための下水道増補幹線の整備を行っている。

改築事業では、中部水みらいセンターの水処理電気設備更新工事など、水みらいセンター12箇所、ポンプ場23箇所で改築事業を実施している。下水道増補幹線の整備では、中央北増補幹線など４幹線で整備を進めている。

また、施設の老朽化度合いを示す有形固定資産減価償却率は57.3％（平成29年度全国平均は44.4％）と比較的高く、施設の老朽化が進んでいるといえるため、稼働機器や流入水質の確認により、運転管理の安全性や信頼性の向上、点検の重点化を図っている。

## **２　決算概要**

（１） 経営成績

当年度の収益及び費用の内容を予算と比較すると、次のとおりである。

流域下水道事業収益は、有形固定資産の長期前受金戻入が予算額に比較し増加したこと等に伴い、予算額に比較して４億1,200万円の増加となった。

流域下水道事業費用のうち、営業費用については、入札による工事費の減少等により６億3,100万円減少した。また事業用地売却に伴い特別損失が３億5,800万円増加した。



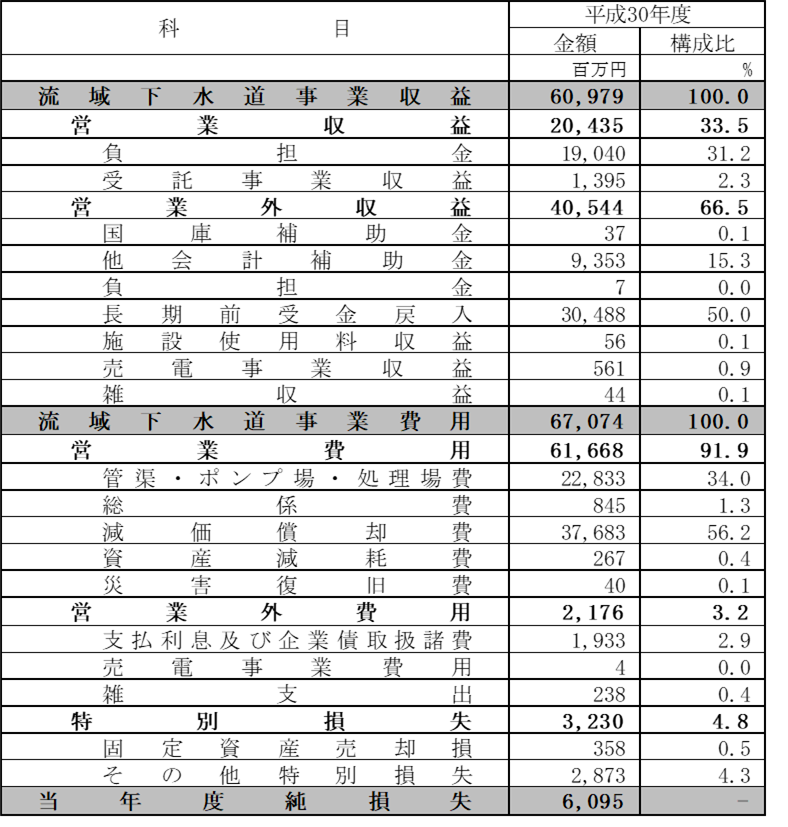


注１：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

数値が０となっている項目は、50万円未満の数値があることを示している。

注２：営業外費用の不用額△3,100万円および特別損失の不用額△3億5,800万円については、それぞれ控除対象外消費税にかかる雑支出および固定資産売却損を、予算時点では計上せず決算確定額をもって計上をしたことによる。

損益計算書に基づく当年度の収益及び費用の内容は、次のとおりである。

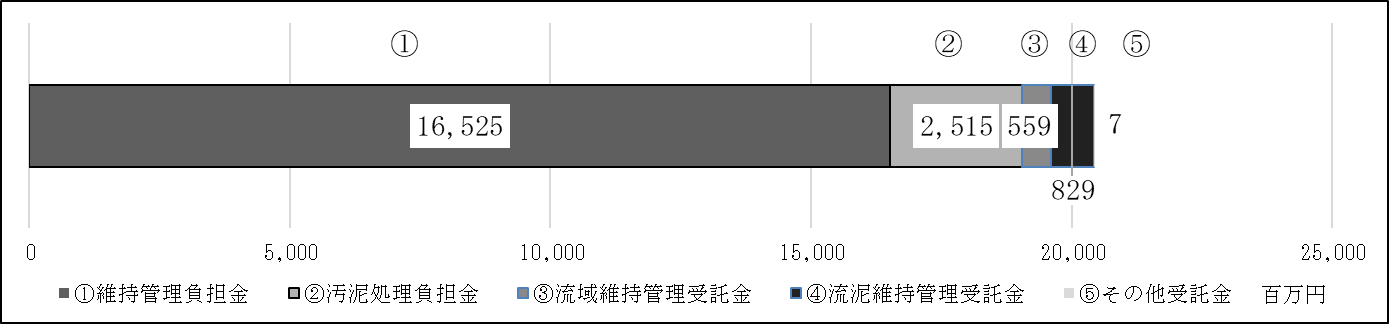


注：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

数値が０となっている項目は、50万円未満の数値があることを示している。

ア　営業収益について

営業収益のうち主なものは、関係市町村などからの負担金190億4,000万円（維持管理負担金165億2,500万円、汚泥処理負担金25億1,500万円）、流域維持管理受託金５億5,900万円、流泥維持管理受託金８億2,900万円等である。



：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

#### イ　営業外収益について

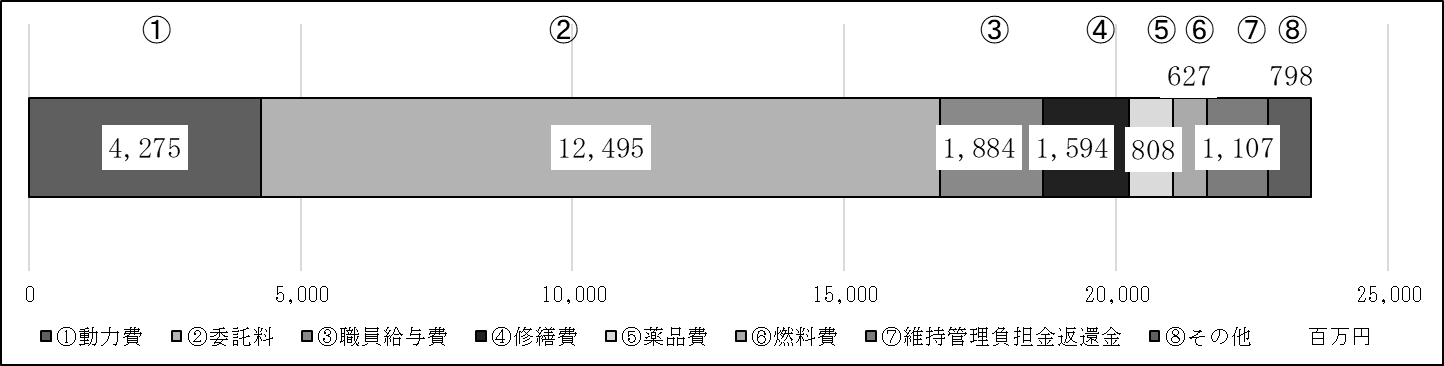
（ア）他会計補助金93億5,300万円は、一般会計からの補助金である。

（イ）長期前受金戻入304億8,800万円は、法適用に伴い計上した減価償却費及び有形固定資産の一部除却見合いの長期前受金収益化の額である。

##### （ウ）売電事業収益５億6,100万円は太陽光発電の売電収入である。

#### ウ　営業費用について

##### （ア）管渠・ポンプ場・処理場費及び総係費の費目別内訳は次のとおりである。



注：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

（イ）資産減耗費は、有形固定資産の一部除却に伴う帳簿価額の減少である。

（ウ）災害復旧費は災害復旧にかかる修繕費である。

エ　営業外費用について

（ア）支払利息及び企業債取扱諸費19億3,300万円の内訳は、企業債利息18億8,800万円及び企業債取扱諸費4,600万円である。

（イ）雑支出は、全額、控除対象外消費税にかかる雑支出２億3,800万円である。

オ　特別損失について

（ア）固定資産売却損は今池水みらいセンターの事業用地の一部を売却したこと等に伴うものである。

（イ）その他特別損失は、全額、法適用に伴い計上した、各種引当金繰入額の過年度分である。

次に、経営分析のための主な財務分析比率は、次のとおりである。



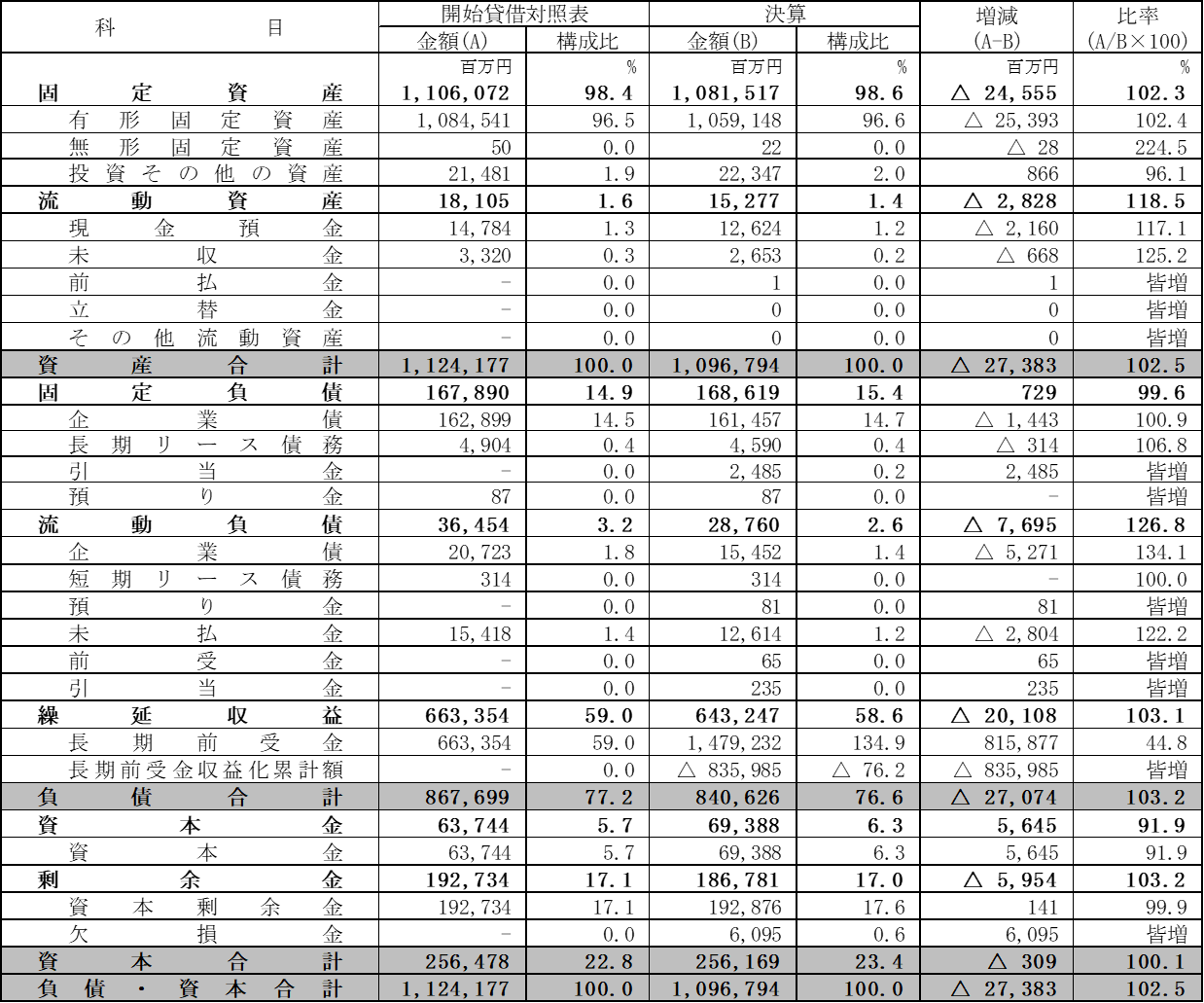
注：

・総収支比率は、当該年度において、総収益で総費用がどの程度賄えているかを、営業収支比率は、営業収益で維持管理費等の費用をどの程度賄えているかを表す指標である。この比率が高いほど利益率が高いことを表し、数値が100％未満の場合、単年度の収支が赤字であることを示している。

・職員給与費対営業収益率は、職員給与費が営業収益に占める割合を示す指標である。

（２）財政状態

貸借対照表に基づく資産、負債及び資本について、開始貸借対照表と比較すると、次のとおりである。



注：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

数値が０となっている項目は、50万円未満の数値があることを示している。

ア　固定資産について

当年度における固定資産の増減及び減価償却の状況は、次のとおりである。



注：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

数値が０となっている項目は、50万円未満の数値があることを示している。

（ア）有形固定資産の主な増加内容は、今年度供用開始した資産として、寝屋川流域 川俣水みらいセンターの水処理電気設備等更新事業 15億8,800万円、中央(一)増補幹線建設事業（分水施設）9億3,600万円、猪名川流域 原田水みらいセンターの塩素混和池建設事業5億3,800万円、受変電設備等更新事業 5億6,600万円等の他、建設仮勘定103億1,300万円である

（イ）有形固定資産の主な減少内容は、大和川下流流域の今池水みらいセンターの用地売却 10億9,100万円、改築更新事業に伴う除却資産として24億8,700万円の他、資産の供用開始に伴う本勘定への振替による建設仮勘定の減43億4,100万円である。

（ウ）投資その他の資産の主な内容は、流域下水道事業減債基金223億600万円である。

イ　流動資産について

現金預金の増減については　(3)　キャッシュ・フローの状況を参照されたい。

ウ　固定負債について

（ア）企業債1,614億5,700万円は、当年度末から１年を超えて償還期限が到来するものである。

（イ）長期リース債務45億9,000万円は、支払予定日が当年度末から1年を超えるものである。

（ウ）引当金24億8,500万円は、法の適用により当年度より計上された退職給付引当金である。

エ　流動負債について

（ア）企業債154億5,200万円は、当年度末から１年以内に償還期限が到来するものである。

（イ）短期リース債務３億1,400万円は、支払予定日が当年度末から1年内のものである。

（ウ）未払金126億1,400万円は、経費や建設工事代金等の未払である。

（エ）引当金２億3,500万円は、法の適用により当年度より計上された賞与引当金１億7,400万円及び法定福利費引当金6,200万円である。

オ　繰延収益について

（ア）長期前受金１兆4,792億3,200万円は、国庫補助金、他会計補助金、受贈財産評価額及び負担金である。

（イ）長期前受金収益化累計額8,359億8,500万円は、法の適用により当年度より計上された長期前受金戻入であり、減価償却費及び資産減耗費見合い分である。

カ　資本金について

当年度一般会計からの建設工事等にかかる出資金56億4,500万円により、資本金は693億8,800万円となっている。

キ　剰余金について

（ア）資本剰余金1,928億7,600万円は、国庫補助金1,338億8,900万円、負担金561億8,900万円及び受贈財産評価額27億9,700万円である。

（イ）欠損金60億9,500万円は、当年度純損失60億9,500万円である。

次に、経営分析のための主な財務分析比率は、次のとおりである。



注：

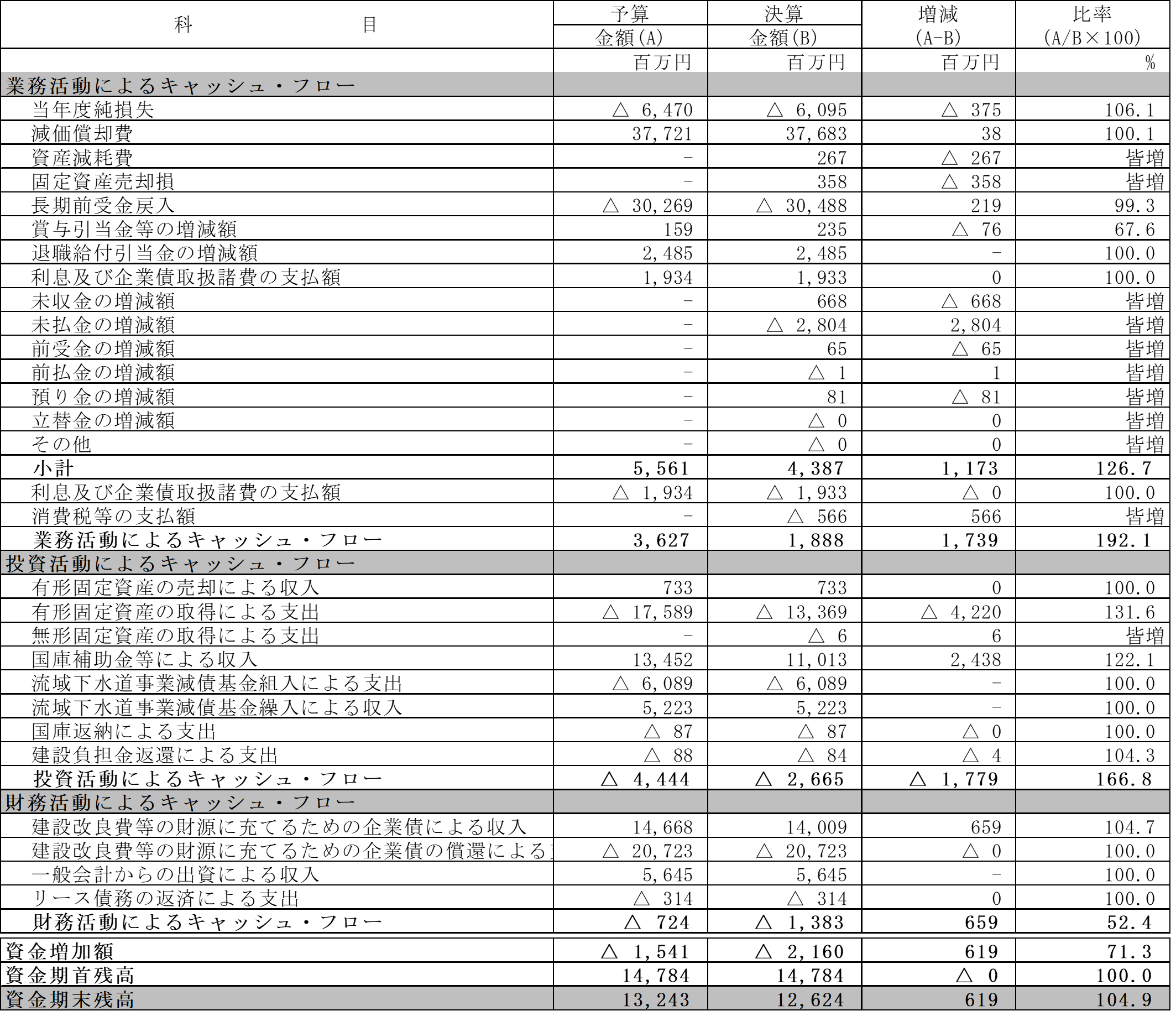
・自己資本構成比率は総資本（負債及び資本）に示す自己資本の割合である。

・流動比率は短期的な債務に対する支払能力を表す指標であり、一般的に100％を下回るということは１年以内に現金化のできる資産で、１年以内に支払わなければならない負債を賄えていない状況にあることを示している。

・当座比率は、当座資産（現預金、未収入金）との対比で支払能力をみる指標である。

（３）キャッシュ・フローの状況

当年度のキャッシュ・フローの状況は、次表のとおりであり、業務活動によるキャッシュ・フローが18億8,800万円の収入、投資活動によるキャッシュ・フローが26億6,500万円の支出、財務活動によるキャッシュ・フローが13億8,300万円の支出となった結果、資金減少額は21億6,000万円、期末資金残高は126億2,400万円となっている。



注：数値は四捨五入しているため、合計と内訳が一致しないことがある。

数値が０となっている項目は、50万円未満の数値があることを示している。

ア　業務活動によるキャッシュ・フロー

業務活動によるキャッシュ・フローは、通常の業務活動の実施に係る資金の状態を表している。当年度純損失△60億9,500万円に対して、減価償却費376億8,300万円、長期前受金戻入304億8,800万円等により、18億8,800万円の収入となっている。

イ　投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローは、将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態を表す。当年度は、有形固定資産の取得による支出133億6,900万円、国庫補助金等による収入110億1,300万円、流域下水道事業減債基金組入による支出60億8,900万円、流域下水道事業減債基金繰入による収入52億2,300万円等により、26億6,500万円の支出となっている。

ウ　財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動によるキャッシュ・フローは、業務活動及び投資活動を行うための財務活動に係る資金の状況を表している。当年度は、建設改良費等の財源に充てるための企業債による収入140億900万円、建設改良費等の財源に充てるための企業債の償還による支出207億2,300万円、一般会計からの出資による収入56億4,500万円等により13億8,300万円の支出となっている。

（４）経常の損失の発生について

当年度は経常損失が28億6500万円発生している。この主原因は、減価償却費等（企業債利息等を含む）にあたる収益が不足しているためである。

一般会計からは、元利償還金や減債基金積立金のほか、維持管理費等の一部に他会計補助金（収益的収入）と他会計出資金（資本的収入）を繰入れている。

一般会計からの繰入により、資金の不足には対応しているものの、損益計算上（収益的収益）は収益不足となっている。

平成30年度における公費負担額（一般会計からの繰入額）は次のとおりである。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 区　分  年　度 | 収益的収入 | | 資本的収入 | | 合　計 |
| 一般会計からの繰入額 | 繰入率 | 一般会計からの繰入額 | 繰入率 |
| 平成30年度 | 百万円 | ％ | 百万円 | ％ | 百万円 |
| 9,353 | 14.9 | 5,645 | 15.3 | 14,997 |

注：繰入率は収益的収入または資本的収入に対する繰入金の比率を表す。

上記の経常損失は、減価償却費等に対応した収益の不足によるため、私費（受益者負担）相当分に対して他の都道府県の大半でも採用されている、総務省の示す地方財政措置の考え方（公費：私費（受益者負担）７：３） を踏まえる等、適正な受益者負担ルールが必要であり、府では現在、関係市町村と共に対応を協議している。

（参考）平成30年度　損益計算書より

|  |  |
| --- | --- |
| 科　　目 | 金　額（百万円） |
| 営業収益 | 20,435 |
| 営業外収益 | 40,544 |
| 営業費用 | 61,668 |
| 営業外費用 | 2,176 |
| 経常損失 | 2,865 |